

第三回俳句賞「25」 大賞

我らが日々に

神奈川県立横浜翠嵐高等学校

水道水細し残暑の体育館

運動場白線上のいぼむしり

記念碑の文字うすうすと秋彼岸

校庭に審判の笛秋澄めり

稲妻や仰げばすでに空暗し

街灯の消えかけている夜寒かな

ブレザーのボタンを留めて暮の秋

十六の我振り返り冬に入る

線香の匂いのつんと冬の夜

塾へ行くファミマのおでん缶ココア

冬の蜂廃品回収車に越され

日向ぼこ心に猫を飼う人と

友二人歩調のそろう小春かな

黒板を大きくつかう冬日和

木枯や校歌の海を見はるかす

放課後の永遠めきて冬茜

木枯に鳩ばつと飛ぶ背の白さ

自転車は立漕ぎでいく冬の夜

区民館にドリブルの音冬の星

「暇なの？」と塾の先生三が日

猫撫でるように初氷に触れる

雪積もる道を選びて歩きけり

ジャンパーの肩いつまでも消えぬ雪

校門を出て見上げたる冬満月

寒風に母の歩幅の狭くなり